

嬉野市政治倫理審査会・吉田一穂会長 様

会食参加者（アニメ企画発案者）氏

2月5日付陳述書における疑問点等

2019年2月12日

「嬉野をよくする市民の会」代表
宮崎 誠一

茶師アニメ発案者である会食参加者氏が2019年2月5日付で提出した陳述書に以下、疑問点等を挙げる。

陳述書「①茶師プロジェクトが進められた経緯（前略）ツアーの趣旨が観光目的だったと言うことはご理解頂けるかと思えます。本来嬉野で同級生で友人でもある嬉野創生機構代表さんが案内役だったのですが急遽お仕事で代わりに市職員Aさん達が案内してくれたので、お礼も兼ねて東京にいらしたらみんなでもまた集まりましようという流れになりました。その流れの中で、メンバーの一人である氏名さんがアニメ好きということもあり、なんとなくのノリで茶師プロジェクトという名前になりました。同年5月にツアーメンバー中心でカラオケボックスに集まったことはありますが、殆どの方がお酒を飲んだ上での冗談話しが中心で企画会議というようなものではありませんでした」

→観光目的のツアーを業務中の建設・新幹線課(役職)である市職員Aが案内しているということか。ツアーは1度きりではなく6月にも行われている。東京出張は会食参加者（アニメ企画発案者）氏らの提案があつて初めて実現した。1月25日付の市職員Aの陳述書によれば「平成29(正しくは30)年6月24、25日に会食参加者（アニメ企画発案者）さん会食参加者（アニメ制作会社）さん氏名さんの3人で嬉野に来られた時には、『セグウェイジャパンの大塚会長を知ってるので紹介できます。一緒に視察しませんか?』とお誘いを受けました」とあり、実際に視察には会食参加者（アニメ企画発案者）氏と会食相手方（東京ベイコート倶楽部ロイヤルスイートの所有者）が同行している。茶師プロジェクトのLINEグループをつくったのは会食参加者（アニメ企画発案者）氏本人である【調査請求書・別

添資料3の2】。5月31日の打ち合わせがかなり具体的なものであったことは議事録から分かる【調査請求書・別添資料4の2、第2回審査会資料7、第4回審査会資料4】。

「その後、平成30年7月9日にセグウェイ試乗会と夜の会食を企画しました。
(中略) そういう意味では4月の嬉野ツアーと7月のセグウェイ試乗会との関連性もあまりありません」

→セグウェイ視察は、6月24、25日の嬉野再訪時に会食参加者(アニメ企画発案者)氏らが提案しており、26日午前10時55分に市職員A、市職員Bの東京出張が会食参加者(アニメ企画発案者)氏により報告され、同11時56分には東京ベイコート倶楽部での会食と両名の宿泊が決定している【調査請求書・別添資料3の2】。6月の嬉野ツアーと7月のセグウェイ視察、東京ベイコート倶楽部での会食は密接に関係している。

「村上市長につきましては特に意識はしていませんでしたが、当日著名な漫画家である会食参加者が夜の飲み会に参加するという事を市長が知り、急遽参加されることになったようです」

→村上市長が参加したセグウェイの視察に同行しているのに意識されなかったというのはどういうことか。やはり、市長はオマケで嬉野市役所で押さえるべき本命は市職員Aだと見抜いていたということだろうか【第2回審査会資料16】。「ようです」というのは、村上市長の1月29日付陳述書「漫画家さんのような著名な方たちに嬉野市をPRする絶好の機会と思い、参加することにしました」を読んでいるということか。会食中で分かったことであれば「と話されていました」などと陳述するはず。不自然だ。

「②茶師プロジェクトの基本構想があったのか、あればその内容 そもそも普段の遊び仲間の旅行で盛り上がった余韻で作られたグループLINEのネームですので計画性などあるわけもなく、企画書作成者さんは一番盛り上がってましたが他のメンバーは終始聞き流している状態でした。私は元々企画書作成者さんの友人ということもあり、なんとなく合わせている感じでしたが他の企業メンバーの方々は誰一人具体的な提案のお手伝いをする人はいませんでしたので、私もそのうち熱が冷めていくのを見守っている状況でした」

→氏名氏に責任を押しつけている印象が強い。しかし、茶師アニメ発案者は会食参加者（アニメ企画発案者）氏自身だ。アニメ制作会社「会社名」の会食参加者社長らが積極的だったことはLINEのやり取りなどから明白である【調査請求書・別添資料3の2、同4の2、第2回審査会資料7、第4回審査会資料4】。村上市長らの主張に沿うためであろう、茶師アニメに対する否定的見解を強調しすぎている。

「③嬉野市の事業として進められていたのか、進める計画があったのか LINE上に企画書作成者さんが企画書のようなものをアップしましたが、それに対して市役所側の方々の意見を求めた事ありません。（中略）ほとんどアニメ制作に関して素人である企画書作成者さんや私がそのようなものを作るはずもございませんし、本当にアニメを作るのであればその道のプロにお願いするのが道理かと思えます。他のメンバーの方々がそれらに協力なかったのは上記にも述べている通りです。皆さん本業が忙しい方達ばかりですし、素人の遊びに付き合ってるほど暇でもないというのが本音だったのかと思えます」

→企画書作成者氏の「佐賀県嬉野市役所様 ご提案書 茶師プロジェクト 茶師×アニメによる地方創生」は、各地で盛んになっているご当地アニメと聖地巡礼についてまとめており、嬉野でいえば嬉野茶の茶師を題材にしたアニメが可能である旨を提案している。独自調査のデータはないものの、決して荒唐無稽な内容ではない。茶師は雑誌「ディスカバージャパン」や渋谷の茶葉店「幻庵」などを通じて、市民氏を中心に注目が集まっており、全国的に発信可能な嬉野市の資産と言ってよい。そうした意味から、今回の企画がこのような形で露見しなければ、あるいは透明なプロセスの下に進められていたとすれば、むしろ嬉野市にとってはよかったのではないかと請求者側では考えている。残念ながら取引相手が建設・新幹線課部署名や嬉野創生機構であったこと、対公務員・対政治家のもてなしにおいて、倫理上の知識がなかった点が惜しまれる。

未明の午前零時半過ぎにアップされていることを踏まえても、企画書作成者氏のプレゼン資料は労作と言っていいのではないか。この提案書がアップされて後、ゲーム会社社長、アニメ制作会社社長、ゲーム会社執行役員がお礼を述べ、会食参加者（アニメ企画発案者）氏自身が「みっちゃんありがとうございます！！」と感謝している。

6月の嬉野ツアーについて、アニメ制作会社「会社名」の会食参加者社長は「とても前向きな激烈出張でした！！もろもろ夢が広がります！」と投稿している。

観光ツアーではなく、自社の業務拡大につながる可能性を含んだ視察であったことを物語っている。会食参加者（アニメ制作会社）氏は「その道のプロ」である。

会食参加者（アニメ企画発案者）氏自身も「かなり濃い一泊二日でした！！先ずは出来るところからやって、またアニメにも繋げたいです！」と発言している。とすれば、6月のツアー中はアニメ企画の議論は小休止状態にあったと考えられる。別の案件（セグウェイのイベント）などをやって、その後にアニメの話を進めたいという趣旨であろう。

フェイスブックの投稿から、会食参加者（アニメ企画発案者）氏は芸能プロダクション出身で声優・アイドルの後見役もしていることが分かる。当然「素人」ではないし、企画書作成者氏も「素人」の域を超えている。キャラクター原案を担当することになっていたが、それは十分可能だったのではないかと推察する。

躍起になって茶師アニメを否定しているが、表面化した経緯が悪かっただけで、企画そのものは何も悪くない。接待した側の認識が甘かった点はあるが、公務員・政治家側が断るか、妥当な形での会食にセッティングし直せばいいだけの話だった。市職員や市長の責任こそが問われているのであり、嬉野市のまちおこしの一助になればと尽力した民間人・事業者が悪いことをしたというわけではない。

しかし、この陳述書を読むと、村上大祐市長の供応接待を否定するために、自分たちがよかれと思ってやってきたことをすべて否定させられている印象が拭えない。きわめて不幸なことであり、同情を禁じ得ない。